

新報

島根県教育庁
隠岐教育事務所
隠岐の島市瀬戸口24
電話 2-9772

隠岐の島町の教育活動

隠岐の島町教育委員会が取り組んでいる教育活動の様子を、派遣指導主事と派遣社会教育主事が紹介します。

【学力向上対策事業】

隠岐の島町では、学校・家庭・教育委員会が連携し、学力向上対策事業に取り組んでいます。その中で、授業力向上に係る二つの取り組みについて紹介します。

一つ目は、教科指導力向上セミナーです。今年度は夏季休業中に二つの研修を行いました。

国士舘大学北俊夫先生をお招きした「社会科教科指導力向上セミナー」では、新学習指導要領について学び多岐研修でした。総則の背景にあるもの、それを具現化するポイントを示唆していただきました。

プール学院大学の松久真実先生をお招きした「ユニバーサルデザ

イン研修会」では、授業づくりの基盤となる「あったかいクラスづくり」についての研修会でした。

学級には、

自閉症・A

DHD・愛

着障がいな

ど様々な子供が混在します。その状況の中で、いかにして低刺激の教室にするのかを学びました。刺激・言葉を減らす、静寂の時間を増やす、好意に満ちた言葉かけなど具体的な事例を挙げながら話していただきました。



二つ目は、専門部会です。小学校の学年部会、中高の教科部会、小中高特別支援教育部会、指導連携部会を設置し、計十三の専門部会が活動しています。

小一部会では、町学力調査（四月）の小二の結果を分析し、年度の指導の課題を明確にして今年度の取り組みを考えました。夏休みに国語・算数の指導案をみんな

で検討し、二学期に研究授業を実施。研究協議を通して部員の授業力向上を図りました。他にも隠岐教研の専門部会とねらいを共有して研修を共同実施した中高の教科部会もありました。これらの教職員の主體的な研修が子供たちの学力向上につながっていくことを期待しています。

【町民の多彩な活動と社会教育の役割】

（文責 増本）

隠岐の島町社会教育委員の会では、昨年から町民の生涯学習や社会教育に関わる団体・サークルなどの調査を行ってきました。体育施設利用スポーツ団体の数は延べ約百、文化・芸術・ボランティア活動団体は約五十、地域ごとの団体などが高齢者サロンを含めると百以上になります。他にも伝統文化保存会やイベント実行委員会

PTAや婦人会など組織ごとの会が多くあります。そこでは、趣味サークル活動だけでなく、地域の活性化、諸課題に正面から向かう活動、各関係機関・団体の活動など多彩に取り組まれています。この町民の多彩な活動団体は個人的・細分化された団体もありますが、貴重な人材の宝庫と見ることもでき

ます。そのような現状の中で、社会教育委員が任意に選んだ団体と意見交換を行いました。

○子育てグループ「オヤトコ」

○隠岐の島町婦人会

○岬町自治会・分館

この三団体との意見交換を行う中で、各団体の課題や社会教育への要望が出されました。課題の一番は「人材不足」と「人材確保」です。高齢化や地域コミュニティの希薄化などのせい、役員やリーダーのなり手がいない、支援してくれる人が少ないということ

です。そして、社会教育委員からは、町民に社会教育という顔が見えないという指摘をいただきました。

今、社会教育には地域課題への対応、特に「これからの地域を担う人材の育成」への期待がかかっています。教育委員会や公民館

社会教育施設は、人材育成のための仕掛け作り（例えば分館活動への支援、リーダー研修や地域課題対応の講座開設、各団体の連携・協働のコーディネート、など）を早急に図って行く必要があります。

（文責 田中）

人権・同和教育 研究事業

海士町立海士小学校が平成二十九・三十年度の二カ年、文部科学省から人権教育研究指定校に、また島根県教育委員会から人権・同和教育研究指定校に指定され研究を行っています。加えて、海士小学校PTAは、島根県教育委員会から人権・同和教育「PTA活動」育成事業の指定を受け、学校や家庭における人権・同和教育のより効果的な推進を目指しています。

海士小学校は研究主題を「自己を大切にして学び合い、意欲的に行動する子どもの育成」に設定し、授業づくり部会、集団づくり部会、環境づくり部会の三つの部会を研究組織に組み入れ、全校体制で研究を進めています。

先月は、授業づくり部会の取り組みの一つである道徳の授業研究が、三・四年生複式学級で行われました。当日は、近隣の小中学校からの参観者や、隠岐郡教研の人権同和教育部会や複式部会からの参観者もあり、多くの参観者のもとでの授業公開となりました。道徳科が来年度から小学校で（再来年度からは中

学校で）全面实施されますが、道徳の授業の関心の高さを感じました。授業では、先生の発問に対し、一生懸命考え、臆することなく意欲的に自分の考えを発表しようとする児童の姿がありました。このように、誰もが自分の考えを言える学級集団は、安心して学び合い高め合えることのできる集団であり、このような学級集団を育てるとは人権教育の推進にあたって大切にしてほしいの一つです。

研究授業を行うための指導案検討の様子を伺ったり、ねらいに迫るためにどうすれば良かったかを話し合った研究協議の様子を拝見したりする中で、管理職を始め、研究主任、道徳教育推進教師を核として、全教職員が連携・協力し、授業者を支えていることが伝わってきました。また、このような教職員集団の姿や授業者の児童への接し方の一つ一つが、「隠れた方キミ」となって、児童に良い影響を与えていると感じることができました。そして、児童生徒を中心に据えて、教職員全員が同じ方向をめざして教育活動を推進していくことの重要性を改めて感じました。

（文責 吉山）